

柔道における間合いの実態 —早稲田大学柔道部を事例として—

スポーツ文化研究領域

5011A026-4 金子慶多

研究指導教員：寒川恒夫 教授

1. 研究背景

日本芸能や武道・武術において「間」や「間合い」は、それぞれ確立された概念であり、日本文化を特徴づけるものと言われている。特に剣道では、教則本の中で「間合い」は項を設けて論じられていることが多く、さらに「間」や「間合い」に関する研究も多く存在することから、その重要性が窺える。一方、日本文化に位置づく柔道は、オリンピック種目として国際的に展開する競技スポーツの一つである。今日、柔道における稽古や試合の現場では、剣道と同様に「間合い」という言葉を用いる場面が多く見られる。しかしながら、柔道の教則本に「間合い」は示されておらず、さらに主要な柔道研究誌でも「間合い」に関する研究は皆無である。つまり、柔道において「間合い」は教則本などで用いられていないにも関わらず、現場において実践者間では頻出する語であるといえる。これは、他の武道と比較しても、特殊な事態といえるだろう。

2. 研究目的および手法

本論文では、柔道競技における実践の場での「間合い」に対する認識を、早稲田大学柔道部を対象に明らかにすることを目的とする。

本研究では、文献を用いた先行研究の検討と、早稲田大学柔道部を中心に人類学的手法を用いフィールドワークを行い、その結果を分析した。

3. 日本芸能における「間」

日本芸能の研究においては「間合い」に比べて「間」という概念について研究されてきた。その中で本論文では、「音楽」、「歌舞伎」、「舞踊」という三つの分野の「間」に焦点を当てる。

これら三つの分野では、それぞれに特有の「間」があるが、音楽→歌舞伎→舞踊というように集団的な芸能からより個々人の身体技法に比重が置かれる芸能になっていくにつれ、「間」に対する論究は身体の運動から「深層心理」の表現といった方向に向かう傾向が見られた。

4. 剣道における「間合い」

武道の中で剣道は、最も「間」あるいは「間合い」の研究の蓄積がある。高野佐三郎(1863-1950)は、近代剣道の基盤を築いた人物である。高野は、剣道における「間合い」を明確に定義し、さらに「間合い」と「間」に分類して述べる。「間合い」を自分と相手との「距離」とし、そこにはお互いの体格や技術などが複雑に絡み合うことで、単に「距離」とは言えないものと指摘する。その上で、「一足一刀の間合い」という基準の「間合い」を定めた。また、自らの手元を「間」と称し、相手の「間」に入ることこそが勝負の決め手であると述べる。このような高野の定義が、今日の剣道の「間合い」概念として用いられている。ここには、相手を殺傷することを目的とする剣術から、競技において勝敗を決する剣道への移行が背景として存在している。

一方、大保木は、高野が定めた剣道における間合い概念を、「気」という概念の下で考察している。特に、「一足一刀の間合い」に対して、「意識と無意識のズレが身体の動きとして顕在化する場（気の生ずる場）なのである。気の観点からすれば、この危険な場に自分がどのように立てるか、自分の『心』の状態がいかなるものか、それを競い合うことが剣道の特性」（大保木，1997，p.88）と

いう。また、大保木は自らの実験を用いて「間合い」を数値化したデータとして示し、剣道経験者、未経験者ともに同様の「間合い」傾向が見られることから、実際の身体性に根ざしていることを指摘する。

5. 柔道における「間合い」

柔道以前の柔術の伝書内では「間合い」という語は管見の限り、ほとんど見られない。その中で、抜心流柔術の伝書内で、武器（短刀）を持った場面における説明で「間合い」の語が使用されている。嘉納治五郎（1860-1938）は、柔道に「間合い」という用語を用いらず、具体的な「距離」として述べた。これは、嘉納が柔道に心法を用いらず、科学的な語を用いたためであるといわれる（寒川，2006，p.256）。しかし、富木謙治（1900－1979）は柔道の文献の中で「間合い」という語を使用している（富木，1991，p.142）。富木は、柔道に留まらず合気道を始めとした多くの武道の研究をした人物であり、その背景が「間合い」という語の再構築につながったと考えられる。しかし、この富木による「間合い」の再構築がされたものの、現在の柔道では依然として、「間合い」という語が記述として定着していないといえる。

6. 現場で使われる「間合い」

これまでの議論をもとに、柔道の実践の場で使われる「間合い」とは、どのようなものであるかを明らかにする。そのために、大保木の実験を再構築したものを、剣道部員、柔道部員を対象にして行った。結果、は以下ようになった。

- 全体的に大保木が指摘した「間合い（距離）」と重なる傾向がある。
 - もっとも近づく「間合い」に着目し両部を比較すると、剣道部員は「一足一刀の間合い」、柔道部員は「攻防の間合い」で止まる。
- このことから、競技性が持つ「間合い」は大きく影響している傾向があることが分かった。

さらに、柔道における「間合い」の認識について、質問紙と聞き取り調査を用いて明らかにした。部員の共通認識として、「間合い」を自分と相手との「距離」として、柔道において重要なものと捉えていた。そして、そこには得意技や相手の大きさなど場の状況が関連することによって変化すると述べ、「距離」は説明することが出来ない「感覚的」なものとして捉えていた。このことは、剣道で高野が定義した「間合い」論に極めて近いものであることがわかる。

また、「間」について多数の部員は柔道に用いないとしたが、高野の定義を基に考察すると、「間合い」を語る上で「間」的な要素を含む内容を述べていた。さらに、相手と「組み合った状態」と「組み合っていない状態（組手争いの状態）」に分類し、前者を「間合い」、後者を「間」と捉えている部員も存在した。これらの背景には、国際化と共に変更されてきた柔道競技の在り方があると考えられ、すなわち、組んだ状態を想定していた嘉納と、現在行われるような組み手争いを重視するような世界的な「JUDO」との差異が存在していると考えられる。つまり、「間合い」という語は、柔道の行われ方、さらにいえば勝敗の在り方次第でいくらかでも変化する可能性を持つといえる。

7. 結論

早稲田大学柔道部では、高野がいうような「間合い」に近い意味で使用されており、それぞれが重要視していた。しかし、そこには柔道における勝敗の在り方が関連しており、その変化により「間合い」という語の捉え方はいくらかでも変わっていく可能性があることが指摘できる。

<参考文献>

- [1] 高野佐三郎『剣道』島津書房出版 1914.3
- [2] 大保木輝雄「武芸心法論についての一考察（その3）－近世後期の剣術伝書をめぐって－」『埼玉大学紀要教育学部』第46巻第1号、1997、pp.85-89